

〈書評と紹介〉 ジョン・アーリ著／吉原直樹・高橋雅也・大塚彩美訳『〈未来像〉の未来：未来の予測と創造の社会学』

根岸, 海馬 / NEGISHI, Kaima

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

745

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

59

(発行年 / Year)

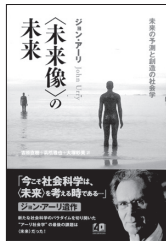
2020-11

ジョン・アーリ著
吉原直樹・高橋雅也・大塚彩美訳

『〈未来像〉の未来

——未来の予測と
創造の社会学』

紹介者：根岸 海馬



はじめに

著者は、イギリスのランカスター大学を拠点に長年精力的な研究・教育活動を展開し、2016年に死去した社会学者である。著者の研究関心は、1980年代から1990年代にかけては、社会・経済変動論、資本主義分析、市民社会論などが中心であったが、2000年代に入ってから、いわゆる「グローバル化」とそれに関わる問題へと移ってゆき、グローバル消費社会論やモビリティーズ論、気候変動論などの分野で重要な業績を残した。彼の著作の多くは日本においても訳出されている。最も広く読まれている『観光のまなざし』（原著1990）は、観光産業において、「見る者」としての観光者と、「見られる対象」としての観光地や「現地の人々」との間の関係、「まなざし」について、その歴史の変遷と現代における新たな展開を明らかにした著作である。その後の著作では、新たな方法論の模索とグローバル化時代の課題についての考察をつうじて社会科学に新たな展開／転回をもたらそうとした。2003年に出版された『グローバルな複雑性』では、グローバル化が進む中で社会が複雑化し、人々の生活が大きく変化していることを指摘し、現代世界を理解するための新たな方法論として、多くの既知・未知の

要素が相互に作用しあって形成される予測不可能なものとしての「複雑系システム」の有用性を論じた。また、『社会を超える社会学』（同2000）、『モビリティーズ』（同2007）および『オフショアリング』（同2014）は、グローバル化の中で進むヒト、モノ、資本、情報の移動を中心的なテーマに据え、これらの移動の量や質、頻度や強度の変容に注目しながら現代社会の展開を分析した著作である。さらに、『気候変動と社会』（同2011年、未訳）や『石油の先の社会』（同2013年、未訳）では、グローバルな規模で進む脱石炭・脱石油のポリティクスと気候変動について検討している。本稿で扱う『〈未来像〉の未来』は、2000年代以降の一連の著作で扱ったこれらのテーマに注目しながら、未来を読み解く試みである。具体的には、『グローバルな複雑性』で展開された複雑系システムの思考を分析枠組みとして、それ以降の著作で扱われた移動や気候といった現代世界が直面している課題を、未来に照らしながら検討している。

本書の原著はもともと『What is the future? (未来とはなにか?)』というタイトルで出版されたものである。このタイトルからもわかるように、本書は必ずしも研究者だけに対して書かれているのではなく、より広い読者層を想定している。これは彼の他の著作についても同様と言えることである。また、著者はいずれの著作でも、一定の場所と時代を超えて集められた無数の事例や語りを用いて抽象的な概念を具現化しながら問題提起をおこなっている。

本書は、「未来の正体は謎である」という一見当然に見える前提から出発し、未来を想像し、可視化しようとする人々の営みを描く。そしてこの営みをめぐるポリティクスや権力、それが人々の生活にもたらす影響や視覚を考察する。

本書は著者が2000年代以降取り組んできた社会科学の批判的再構築の作業の集大成である。著者は、未来がどのように語られてきたかという点に終始してきた既存の未来研究の枠を超えた議論を、複雑系理論を中心に据えながら展開する。この一連の作業の中で著者は、構造対個人という古典的な構図に基づいて展開されてきた社会科学に複雑系思考という新たな視点を提示すると同時に、社会科学がこれまで自明としてきた「線形的（リニア）思考」や「定住主義的思考（セデンタリズム）」といった思考様式を解体し、新たなパラダイムを模索する試みをおこなっている。

本書は全体として三部構成で議論が展開されている。「未来の歴史（1～2章）」、「複雑系と未来（3～5章）」、「未来のシナリオ（6～8章）」としてそれぞれ、未来の描かれ方・未来像の歴史、複雑系が形作る未来、未来のシナリオを探索する。以下では章ごとの内容を簡単にまとめ、社会科学批判としての本書の位置づけについて検討する。

本書の内容

第1章は、未来の語られ方をトマス・モア、ウィリアム・モリス、H・G・ウェルズなどに代表されるユートピア的未来像とE・M・フォースター、オルダス・ハクスレー、ジョージ・オーウェルなどによるディストピア的未来像に分類して考察している。これら20世紀初頭およびそれ以前に産業社会が拡大する中で現れた未来予測図の大方はフィクションとして描かれたが、その後の時代の未来像に大きな影響をもたらした。

第2章は、1990年代以降冷戦後の世界が直面した現実を背景とするディストピア的な未来像をとりあげる。1991年にソ連が崩壊した直後はボーダレス世界の実現という夢が現実のも

のになるかもしれないという期待感が高まった。しかし、2001年9月11日のニューヨーク世界貿易センターの爆破事件とそれに続くイラク戦争を皮切りに、描かれる未来像はそれまでのユートピア的なものから急速にディストピア的・破滅主義的なものが主流となる。2000年代に発表されたイアン・マクユアンのSF映画『ソーラー』、アルフォンソ・キュアロンの『トゥモロー・ワールド』やサラ・ホルのSF小説『カルフラン陸軍』やジャレド・ダイヤモンドのノンフィクション『文明崩壊——滅亡と存続の命運を分けるもの』などに描かれる未来の多くは文明の「終わりの始まり」を示唆し、人間社会は必ずしも近代的な段階的進歩・改善を遂げるのではなく、崩壊する可能性もあることを強調する。これらの未来像は、グローバル化の歪みが際限のない暴力・紛争、貧困・格差、食料・環境問題を生み、それらの問題が人間の知が及ばないところで複雑に絡み合いながら人間社会の内側からの瓦解を現実のものとする可能性を警告している。

第3・4章は、その後の章で著者が方法論として用いる複雑系理論の内容を紹介し、この理論に基づいて具体的に社会変化の起こりかたについて検討する。まず第3章の冒頭で著者は、未来を予測する3つのアプローチを紹介している。これらのアプローチは、①自律的で合理的な個人像を前提にして人間の行動に主眼を置く個人主義的アプローチ、②経済・社会構造を重要視する構造的アプローチ、③未来の予測は個人の行動や社会構造だけでは還元できないという立場をとる複雑系理論に基づいたアプローチである。これらのうち、著者は③の複雑系理論を第3・4章をとおして整理・解説する。社会科学において新たなパラダイムとして登場した複雑系理論は、社会を動的で自主的に組織化する予測不能な相互依存システムであるとする。

複雑系理論によれば、このシステムは指揮・命令システムを持たず、あらゆる変化は非線形的（ノンリニア）に起こる。そのため、あらゆる社会変動の原因と結果の間の因果関係を断定することはできないと論じる。しかし、一定程度変化の方向性が定まると、それに社会制度が順応し、中長期にわたってそれが維持されることが多い。これを複雑系理論は、「経路依存」と呼ぶ。このような社会変化のプロセスは不可逆的であると同時に、その時・その場所に特有の出来事として生じる。また、複雑系理論によれば、世界は複数のネットワークから成り立ち、その全体を概観することは不可能である。同時に、全体を構成するパーツの一つ一つの繋がりを完全に捉えることもできない。このため、未来を確実に把握することは困難で、未来の予測は常に不完全なものであるという。未来を事前に計画してもそれは、複雑系システムが持つ偶発性によって多様な事象がそれぞれ違った方向性を持つために、一定の必然性を担保できない。すなわち、政策立案者や技術者が描く線形的（リニア）な未来は非現実的で、実際には多種多様なアクターによる予測不能で非線形的に起こる出来事として未来が現れる。また複雑系理論は、予想外の出来事が、稀に見る急激な変化をもたらすと論じる。このような未来の不確定性を著者は「ジグソーパズル」にたとえる。変化の多くは、小さな要素が「ジグソーパズルのピース」となって集まり、それを完成させる最後のピースが揃うことで大きな変化が導かれる。小さな要素の集積によって大きな変化をもたらされるという視点から、未来がどのように推移するのかは、実際にその変化が起こってからでないと知ることができないものである。著者は、続く章においてこの複雑系理論に依拠しながら未来を考察する。

第5章は、このように常に不確定なものでは

あるが、それでも未来を予測することには一定の意味があることを論じ、可能な未来について検討する方法を提示する。これらの方法は大きく分けて6つに分類できる。それは、①過去に登場したテクノロジーが開発・導入された経緯を検討する方法、②予測された未来がその通りに展開することのなかった事例を検討する方法、③ディストピア的な未来像を描き、現在を生きる人々を警告する方法、④ユートピア的な未来像を描き、それを確固なものにしようとする方法、⑤現時点で既に存在するテクノロジーや価値観から推論する方法。⑥いくつかの想定をシナリオとして描く方法、である。これらの方法による未来研究の展望については、以降の章で明らかにされる。

第6章は、グローバルな生産システムにイノベーションをもたらすテクノロジーについて検討する。1970年以降の西側諸国では、フォーダイズムの生産様式が衰退し、労働の標準化、機械化、低コスト化、分業化が進められた。その結果、多くの企業は労働者の低賃金化と非組織化を求め、新興国への工場移転（オフショアリング）がおこなわれた。この流れの中で、とくに重要だったテクノロジーは、コンテナ船であった。コンテナ船は、グローバル規模での製造・輸送・消費システムを可能にすることで自由貿易を拡大し、現代の社会資本システムの基盤を形成したためである。その上で著者は、このような既存のシステムを弱体化させ、未来の新しいシステムを構想する上で重要な役割を果たすテクノロジーとして、3D印刷を挙げる。3D印刷はグローバルサプライチェーンに縛られることなく、個人の必要に応じた分散型のオンショア製造を可能にするかもしれない。著者は、このテクノロジーに関して展開される未来のパターンとして、まず家庭用の「デスクトップファクトリー」として知的財産の共有化

およびオープンソース化が進む可能性や、グローバル規模で展開されているモノの製造がローカル化され、既存のサプライチェーンによる生産・流通・消費の構造から人々を解放する可能性、また、コミュニティ内での共同製作が主流となり社交活動をつうじた「共有経済（シェアリング・エコノミー）」が立ち現れる可能性、または、単なるプロトタイプとしてあり続け、3D印刷バブルが崩壊してこのテクノロジー自体が終結する可能性を挙げる。このように著者は、3D印刷の展開が既存のシステムを大きく変化させる可能性がある」と指摘する。

第7章は、都市における移動の未来像を描く。石油を燃料とする自動車は、個人消費の拡大や都市システムの整備・建設をもたらしたと同時に、大気汚染や交通事故などの問題を引き起こした。現代社会はいまだに自動車による移動が中心で、自動車中心の生活から脱却するまでには至っていない。では将来、都市における移動はどのように展開されるのか。著者は、都市の未来・ポスト自動車のモビリティ・システムについてディストピア的なものからユートピア的なものまで4つのシナリオを提示し検討する。第一に、ドローンなどの空中移動体や自動運転車による新たな移動様式と水素燃料を中心としたポスト石油燃料という基盤のもと急速な移動を前提とする「高速移動都市」が登場するというシナリオ。第二に、デジタルな出会いが物理的な出会いと同等に語られ身体性が消滅し、人々は電子データの海を漂う一情報となり、その結果、通勤などの物理的な移動活動が減退し「反都市」的な「デジタル都市」が現れるというシナリオ。第三に、多くの人々にとって開かれた、より公的なモビリティ・システムが導入され、私有車の所有が減り、それによる移動の低炭素化・低エネルギー消費で、直接的に人々の関係が結ばれる「住みやすい都市」が

出現するというシナリオ。そして第四に、世界規模で超富裕層とそれ以外の人々との間の格差が拡大し、前者の利益・利権を守るための戦争が起こされ、セキュリティ化された城塞が築かれるというシナリオ。その外側にはホップズの『リヴァイアサン』に出てくるような野生のゾーンが立ち現れ、中心部は高い塀や数多くの監視カメラに護られた「要塞都市」と化す。著者はこれらの中では④が最も現実的な未来および既に存在している未来であるという。

第8章では、未来を検討する際に避けては通れない気候変動の問題を扱う。著者は、これに関して重要な指摘をする。まず気候変動は未来を検討する際の中心的課題となり、気候変動の原因と結果を明らかにするには領域横断的な研究が必要になる。そして気候変動は社会的な問題であり、それをいかに技術的・物理的に乗り越えられるかということは優先的に検討すべき問題ではない。そして経済成長の維持を前提とした国際協定や二酸化炭素排出量取引などのこれまでのアプローチの継続は、未来の問題の解決には役に立たない。そこで求められるのは、気候変動がもたらす未来の世界を考えることであるという。実際に著者は、気候変動がもたらす未来について以下の4つのシナリオを提示する。まず、最も現実的なものとしては、経済成長という目的が最優先され、気候変動が回避されないというディストピア的シナリオである。同様に破滅的なシナリオとして、気候変動がディストピア的な未来を現実のものとし、その後も化石燃料を使い続けるために世界的な社会実験としての気候工学が実行されるというもの。より現実主義的なシナリオとしては、技術革新・イノベーションによって新たな経済が可能となり経済成長が訪れるとする「エコロジー的近代」。そしてもっともユートピア的なシナリオとして、脱成長による「低炭素市民社会」

が実現するというものがあるという。

著者はこのようにシナリオを描き未来を検討することをしながらも、未来の予測に確信を持つことは危険であると強調する。それは、多様な未来を否定することであり、可能な未来をも否定してしまうことになる。むしろ、未来を予測することの本質は、その予測以外の可能性もありうることに、その予測が必然ではないことを人々に理解させることにあるという。未来は常に利害対立の中心にあり、あらゆる意味で進歩を否定するのは今や困難なこととなっている。現在、未来像は国家、企業や技術者によって非民主的に占有されたものと化し、未来を持つ者・持たざる者が出現し始めている。著者は、未来の可能性を考察する方法や思想を展開することをとおして、社会的未来を新しく民主的な枠組みにおいて再構想し直すよう社会科学に要請する。いかに未来を民主主義的に思考し実践できるか、それは社会科学に問われている課題であるという。

本書の位置づけ

社会科学の再構築を目指す本書のような試みは、今日では広く共有されている。これは、社会の変化に社会科学が適応できていないために、社会科学の思考や方法を刷新しようとするものである。この中には、ブルーノ・ラトゥールらアクター・ネットワーク理論における社会科学的人間中心主義への問題提起、ブライアン・マッスミら情動論による社会科学的理性主義への問題提起、ガルミンダ・バンブララデコロニアリティ論による社会科学的コロニアル権力知に対する問題提起などがある。これらの社会科学批判は、既存の社会科学研究が拠り所としてきた科学性による統治を解体する作業であ

るといえる。

本書の限界としては、著者が未来像を論じる際に、西欧世界における未来をあたかも全世界の未来であるかのようなメタナラティブを構築してしまっている点である。著者の描く未来像は、その世界観や価値基準において一貫して西ヨーロッパ男性中心主義的であり、そのためにそれ以外の世界の問題を等閑視している。それは、ジェンダー間格差、人種間格差、地域間格差、経済的発展を遂げた西洋諸国とそれを支える国々の間に存在する搾取・従属・依存関係、紛争や暴力の連鎖、難民問題などである。これらの置き去りにされた問題の未来を検討する作業は急務である。

本書における未来の考察には以上のような限界が存在するものの、本書は著者が2000年代以降取り組んできた社会科学の批判的再構成の作業として、大変重要なものである。著者は、既存の社会科学が未来というテーマについて真剣に取り組んでこなかったことを指摘している。未来像を描くには十分な研究や理論の蓄積が社会科学のいたるところに存在するが、社会科学は未来を語ることを避け、それを技術者や政策決定者などに委任してきた。未来を民主化し人々の手に取り戻すためには、それを公にひらき、共有しなくてはならない。そして、未来の社会科学は、この課題に真剣に取り組む必要があるという。この意味で、本書は社会科学に携わる者に未来への道標を示すものである。(ジョン・アーリ著／吉原直樹・高橋雅也・大塚彩美訳『〈未来像〉の未来——未来の予測と創造の社会学』作品社、297頁、定価2,600円＋税)
(ねぎし・かいま 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)